2015 年度国際看護学演習：米国カリフォルニア州における海外看護研修報告

The Report of Global Health Nursing Overseas Practicum in Los Angeles in 2015

田代麻里江 1)　巽彩香 1)　藤田栞 1)　張暁春 1)
TASHIRO Marie　TATSUMI Ayaka　FUJITA Shiori　ZHANG Xiaochun

要旨

梅花女子大学の海外看護研修は、4 年前期選択科目である国際看護学演習の一環として実施している。2015 年度の研修先は、米国カリフォルニア州ロサンゼルスにある BIOLA 大学を中心に、本学独自のプログラムを実施した。国際看護学演習科目担当教員の国際的なネットワークを生かし、BIOLA 大学および周辺の保健医療施設で、高度医療、コミュニティ病院、老健施設など様々な医療レベルでの看護を学ぶ機会を設けることができた。さらに、多民族社会であるロサンゼルスの特徴と人々の生活を学ぶため、マイノリティのコミュニティ訪問、ホームビジットによるホストファミリーとの交流など、社会的な現象が人々の健康や看護に及ぼす影響についても考える機会を設けた。こうした本学独自のプログラムは現地施設等の受入れ体制も良く魅力的であり、参加学生の満足度は高いことがわかった。

英文要旨

Baika Women's University offers Nursing Overseas Practicum as a part of Global Health Nursing course for senior student's elective curriculum. In 2015, our originally-designed practicum took place at BIOLA University and its surrounding area in Los Angeles, California, USA. Utilizing a global network of the faculty member in charge of the practicum, we provided students valuable learning opportunities about nursing in the States, from primary level health care to the world top level clinical research. Furthermore, we expanded our student's study to experience the uniqueness of Los Angles as a multi-ethnic society by visiting several minority's communities and local families as a home-visit program. Such an originally-designed practicum program is attractive for students.

I. はじめに

梅花女子大学の海外看護研修は、4 年前期選択科目である国際看護学演習の一環として毎年実施している。過去 2 回の研修地は、オーストラリア・ビクトリア州メルボルンのモナシュ大学（Monash University）とその周辺の施設であった。3 回目の海外看護研修となった 2015 年度は、米国カリフォルニア州ロサンゼルス郡を中心とした梅花女子大学独自の研修プログラムを企画・運営した。そこで、本学の新しい試みとしての 2015 年度海外看護研修の報告をする。

II. 国際看護学演習の科目の位置づけ

国際看護学演習は、「異なる文化圏での研修を通して、看護をグローバルな視点から概観するとともに、社会文化システムの看護との関係性について理解を深めること」を学習目標としており、授業は、渡航前学習・海外看護研修・帰国後学習の 3 部で構成されている。

国際看護学演習の先行履修要件として、3 年前期に多文化共生看護学、3 年後期に国際看護学の 2 科目を課している。学生たちは、この 2 科目の講義、グループワーク、国内フィールドスタディ

を通した学習を積み上げ、最終的に国際看護学演習の学習に至る（表 1）。その他の要件として英語自己学習（TOEFL-ITP スコアの提出）、英会話レッスンを課した。渡航前学習・帰国後学習の詳細については表 2 に記した。表中の「現地でのパフォーマンス」とは、訪問施設で学生が披露する日本紹介のレクリエーションのことである。なお、英会話レッスンについては、本学の食文化学部で英語関連科目を担当する教員の協力を得て、渡航前に計 16.5 時間のグループレッスンを実施し、日常会話、自己紹介、病院での会話など実践的な英会話学習を行った。

III. 2015 年度海外看護研修の概要

2015 年度の海外看護研修（以下研修とする）の参加者は、学生 8 名、科目担当教員 2 名、研修見学者（教員）1 名の合計 11 名であった。研修の概要を表 3 に記す。

1. 研修場所

今回の研修地は、米国カリフォルニア州ロサンゼルス郡にある BIOLA 大学看護学部を中心とし、周辺の保健医療施設などにも訪れた。BIOLA 大学は 1908 年に神学校として誕生した私学のキリスト教系総合大学である。大学院と学部からなり、総学生数は約 6000 人である（Biola University, 2015）。ロサンゼルス空港から車で一時間以内とアクセスに恵まれているが、治安の良い居住地域に位置していることから、学生の研修として適している。

表 1　本学の看護専門分野における国際教育プログラム（2015 年度）

開講時期	科目名	単位数	必修/選択
3 年前期	多文化共生看護学	2	選択
3 年後期集中	国際看護学	2	選択必修
4 年前期集中	国際看護学演習	2	選択

2. 研修参加者

研修に参加資格を持つ学生は、本学の 4 年前期選択科目である国際看護学演習を履修する者のみである。毎年応募者は 10 名程度であり、研修先の受入れ人数内であることから、現在まで選考は行っていない。

表 2　2015 年度 国際看護学演習のオリエンテーション・渡航前学習・海外研修・帰国後学習

年	月	授業内容
2014	9	オリエンテーション
		研修概要説明・旅行社申込み
	11	研修施設の概要詳細説明
	12	学生チーム役割分担
		TOEFL-ITP 対策講座（3 時間）
2015	1	現地行動計画話合い
		TOEFL-ITP 受験
		現地でのパフォーマンス準備
		渡航準備説明／関連書類提出
		英会話（計 4.5 時間）
		米国・カリフォルニア州概要／治安対策
	2	英会話（計 9 時間）
		米国の文化・社会／日系人歴史
		米国の保健・医療・看護事情
	3	帰国後：研修の振返り／評価
		研修の学内報告会準備／個人面談
	4	研修の学内報告会準備
		研修の学内報告会
		記録・評価 提出

3. 研修の具体的内容

研修は、2015 年 2 月 27 日―3 月 10 日に実施し、8 泊 10 日間であった（表 3）。

4. 研修先ならびに受入れ体制

1）大学および病院の研修

本研修の中心となった BIOLA 大学は筆頭著者の母校である。実施の一年以上前から研修受入れについて双方で話合いを行った。BIOLA 大学看護学部側の担当者は、学部長 Anne Gewe 教授と

Akiko Kobayashi 准教授で、連絡・調整を担われると共に、研修中には Cross Cultural Nursing（異文化理解と看護）と米国の保険・医療・看護制度の講義も担当された。BIOLA 大学からは、同学部の看護臨地実習病院の一つである City of Hope を研修施設の一つとしてご紹介頂いた。さらに、同学部卒業生で Little Company of Mary Health のケアマネージメント部門で働く Flora Hsieh 氏に Foreign born nurses and U.S. culture(外国人看護師と米国文化）の講義を、また同じく卒業生で Presbyterian Intercommunity Hospital で看護師教育を担当する Colleen Sanchez 氏の協力を得て看護師のシャドウイングを含む病院研修が実現した。各施設での講義や説明の通訳は、担当教員がすべて行い、シャドウイングでは同時に複数の通訳者が必要なため、追加の通訳者を現地で雇用した。

表 3　2014 年度国際看護学演習　海外看護研修スケジュール

	DATE	研修内容
1	2/27(金)	日本を出発
2	2/28(土)	BIOLA 大学看護学生と交流
3	3/1(日)	ホームビジットのホストファミリーと合流 ファミリーとキリスト教会礼拝出席（Grace Evangelical Free Church) ホストファミリー宅訪問・交流
4	3/2(月)	BIOLA 大学：チャペルアワー参加、学内キャンパスツアー BIOLA 大学 看護学部 講義 日本人留学生との交流（Cafeteria)
5	3/3(火)	BIOLA 大学 看護学部 講義 City of Hope　講義・施設見学
6	3/4(水)	Presbyterian Intercommunity Hospital 講義・施設見学・看護師（RN)シャドウイング
7	3/5（木）	全米日系人博物館　グループスタディーツアー チャイナタウン、メキシコ人街　見学・昼食
8	3/6(金)	サウス・ベイ敬老看護施設 施設説明・利用者との交流・パフォーマンス・質疑応答タイム
9	3/7(土)	ロサンゼルスを出発
10	3/8(日)	日本に帰国

2）日系人ヘルスケア施設の研修

ロサンゼルス郡は米国の中でも日系人人口が多い地域であることから、日系米国人に特化したヘルスケアサービスを学ぶため、現地の日系人キリスト教会の Robert Tsujimoto 師（WEST COVINA CHRISTIAN CHURCH）および、Toshio Maehara 師（GOSPEL VENTURE

INTERNATIONAL CHURCH）に連絡をとった。両牧師の紹介により、日系人老健施設のアクティビティマネージャーである Shizuka Sasaki 氏を紹介頂き、Keiro Health Group の一施設であるサウス・ベイ敬老看護施設での訪問研修が実現した。

3）ホームビジット

米国の一般家庭の生活と文化を学ぶため、BIOLA 大学と関係の深い Grace Evangelical Free Church の Kathy Brubacher 氏、Gil Mellis 氏の協力を得て、日曜日の教会での礼拝参加を含む 1 日の学生受入れ企画「ホームビジット」を行った。当初、1 学生につき 1 家族の体制でホームステイを計画したが、学生人数に対し十分なホストファミリーが確保できなかった為、4 つのファミリーにそれぞれ 2 名の学生を受入れて頂くホームビジットという形で現地家族との交流を図った。

4）多民族社会を学ぶ研修

ロサンゼルスは多民族社会であり、その現状を体験するため、ロサンゼルス・ダウンタウンに派生した日本人街、中国人街、メキシコ人街を訪れた。特に日系人の学びに関しては、全米日系人博物館を訪れ日系人の歴史を日本語で説明される語り部ボランティアのサービスを事前に予約し、異国における外国人として日本人が受けてきたチャレンジと応答について深く学ぶ機会とした。ダウンタウンの研修サポートとして現地の状況に詳しい Mitsuko Duran 氏に案内の協力を頂いた。

III. 海外研修の感想と成果：
学生が海外看護研修を通して得た学び

1. 研修施設訪問の概要と感想

1）BIOLA 大学

南カリフォルニアにあるキリスト教福音派系の私立総合大学である。カルフォルニア州のロサンゼルス郡のラ・ミラダ市に主なキャンパスがある。ほかにも数箇所にキャンパスを持つ。

写真 1　BIOLA 大学看護学部での講義

現在創立 104 年になり、もとは神学校であった（Biola University, 2015）。今回私たちは Anne Gewe 先生、Flora Hsieh 先生、Akiko Kobayashi 先生から、米国の保険制度や医療と看護についての講義を受けたり、学食を経験したり、BIOLA 大学の学生によるキャンパスツアーを体験した（写真 1）。

Anne 先生や Flora 先生のアメリカ式の授業では“自分で考えること”を期待する、参加型の授業であった。私たちは、自分の意見や考えを積極的に発言する事に慣れておらず、と惑うことも多かったが、先生方の工夫もあり、異文化理解のグラフを皆で完成したり、意見を述べるとポイントが入る、といったゲーム感覚で 2 日間にわたり、楽しく講義を受けることができた。

学食やキャンパスツアーで私たちが一番驚いたことは、キャンパスの広さ、美しさ、学生の多さ、そして学生寮がキャンパス内にあることだ。学生たちはそれぞれキャンパス内の好きな場所で休憩をし、学生同士で活発な意見交換を行っていた。BIOLA 大学の学生は、私たちを見るとすぐに寄ってきて、コミュニケーションを取ろうとしてくれた。日本では知らない人にフレンドリーに挨拶を行ったり、自ら進んで会話をしに行くことはあまりないことなので、見習いたいと思った。

2) City of Hope

City of Hope は、癌や糖尿病その他の生命を脅かす疾患の為に研究と治療を行う施設で、包括的がん研究センターと称され、アメリカ合衆国の主要な癌研究センターの一つである。確実な患者へのケア、臨床の研究を進めるリーダーとしての役割を果たしている（City of Hope 2015）。今回私たちは、施設内の美しいガーデン、研究部門、病棟部門を見学した（写真 2）。印象的だったのは、正面玄関にある木々に、患者とその家族・友人など、多くの人の願いがこめられた短冊が飾られて

写真 2　City of Hope 訪問研修

いたことだ。さらに「魂のケアがなされていなければ、身体的に治癒していても意味がない」という創設者の願いがこめられている記念碑が、ガーデンに設置されていたことだった。癌についての研究が盛んであり日本人研究者も活躍していた。

この病院の利点としては、研究機関と病棟とが同じ敷地内にあることだ。これは、入院中の患者の希望につながっている、と説明を受けた。小児科病棟では、１つのプレイルームに様々な年齢の患児が集まるのではなく、大きく２つに年齢で分けられており、適応年齢ごとに、遊び道具や楽器が配置されていた。また、Child Life Specialist が多数活躍されていた。

3) Presbyterian Intercommunity Hospital（PIH：プレスビテリアン・インターコミュニティ病院）

PIH は、1959 年に設立された PIH Health の一部であり、2 つの病院、多数の外来患者診療所、専門医学グループ、家庭の医療サービスとホスピスからなる非営利的な、地域のヘルスケア・ネットワークである。PIH は何百もの非営利団体、ボランティアにより支援されている（PIH Health 2015）。

写真 3　プレスビテリアン・インターコミュニティ病院での訪問研修

私たちは、PIH の施設概要および米国の看護職に関する講義を受け、病院見学と病棟看護師に付き添うシャドウイングを行った（写真 3）。また看護部長や、ここで働いている日本人看護師からお話を伺う貴重な機会があった。シャドウイングをする中で、PIH では日本と異なり廊下を歩いている患者が少ないことに気づいた。それは、アメリカでは病院の入院に際し保険会社の影響力が大きい為、重症度の高い患者しか入院していないからだということを、後ほどの説明を得て理解できた。また看護師の業務は、専門分野別に仕事が分担されていて、看護師１人があれもこれもと沢山抱え込むのではなく、採血はこの人担当、体位変換のチーム、モニター管理の部署、と分業して働いていた。

病室の多くは個室であり、総室はあっても患者 2 名のみの収容となっていた。またその総室には、術後やせん妄によってルートを自己抜去したり転倒等のリスクのある患者が入り、各部屋に１人、部屋につきっきりで患者の危機管理を行うシッ

ターという役割の人が配置されていた。このことは患者にとっても看護師にとっても、生命等の危機が無いように見守る管理体制がとられていると感じた。アメリカでは、よほどのことがない限り拘束が行われないため、より患者の人権が守られていることを学んだ。

PIH では、患者とその家族を中心に、様々に工夫し、良い関係の中で医療を行っているということがシャドウイングを通じて感じられた。それは PIH が組織理念として、人間関係を非常に大切にし、職員を家族と同等以上だと考えていることが、看護師の患者、家族への看護の質に影響しているからではないかと感じた。

4）全米日系人博物館 Japanese American National Museum

これは日系アメリカ人の歴史や文化を伝承、展示している博物館であり、ロサンゼルスのダウンタウン近郊のリトルトーキョーに所在している。日系アメリカ人の工芸品、服飾、芸術、写真、オーラル・ヒストリーなど 10 万点以上展示されている。全米日系人博物館では 200 名以上のボランティアが、展示ガイドをはじめとする多くの分野で活躍している（全米日系人博物館, 2012）。

今回私たちは、日系人のボランティアの方々による日本語での特別教育プログラムを受けた（写真 4）。その中で私たちは、太平洋戦争の時に日本の国籍をもつ日系人（1 世）とアメリカ国籍をもつ日系人（2 世以降）をアメリカ政府は「アメリカ市民は平等に扱います」と宣言していたにも関わらず、全員の日系人を収容してしまい、刑務所のような生活をさせたということを聞いた。日本人の顔をしているからという見た目で差別してしまう人間の恐ろしさを感じた。後に日系人を収容したことについてアメリカ政府は謝罪し、アメリカ軍としてアメリカのために戦争で戦った日系人を素晴らしいとたたえた。このようにこの博物館は日系人の辛い経験を代々伝える事で、二度と同じようなことが起こらないようにしていく活動を行っていた。この博物館を訪れてどんな状況にも耐えた日系人を誇りに思った。

写真 4 全米日系人博物館で日系人ボランティアの方から熱心な説明を伺う

5）サウス・ベイ敬老看護施設

サウス・ベイ敬老看護施設の母団体である敬老シニア・ヘルスケアは、1961 年に日系アメリカ人の高齢者のニーズを満たすために設立された非営利団体である。敬老看護ホーム、サウス・ベイ敬老看護施設、敬老中間看護施設、そして敬老引退者ホームを通して日系コミュニティの文化的背景を考慮した継続的なケアを提供している（Keiro Senior HealthCare, 2015）。

写真 5　サウス・ベイ敬老看護施設での講義

私たちは、サウス・ベイ敬老看護施設の見学・講義に続いて施設の高齢者に向けたレクレーションとして体操を行い、飾りを付けたうちわを高齢者の方々に配布した（写真 5）。見学での学びとしては、施設の庭には桜やフジの花など、日本特

有の花が植えられていたり、お雛様が飾られていたりと日本の伝統・文化が取り入れられ、日系人の生活に取り入れる事で、懐かしんだり、気持ちが落ち着いたり、QOL の維持向上につながるのだと考えた。

おむつ交換の実施状況、排便の有無、栄養摂取状態などの記録は廊下の壁に設置された電子カルテで行われており、高齢者の体重の増減に関係する栄養面の事柄をすぐに他職種間で共有できる構造であった。

日本の介護施設は最新の医療設備が整っているが、実際にアメリカの介護施設を見学すると、歩行器が後方に転倒しても衝撃を減らせるような作りになっていたり、施設内の食事や部屋の環境がより家庭的であることを知り、日本の施設にはまだ欠けているものがある事に気づいた。日本の現状だけをみて「発展している」と勝手に考えていたことを痛感し、今後は広い視野をもって日本を見つめる大切さを学んだ。

6) ホームビジット

私たちはそれぞれ学生２名で１つの家族を訪問させていただき、現地の方々の生活・価値観を学んだ。今回ホストとなってくださった家族はいずれもクリスチャンであり、キリスト教の教会にて毎週同じ信仰をもった者同士で集まり、信じていることをともに学んでいる。そのことでお互いに助け合うことが出来、祈ることで気持ちが落ち着いたり、教会で仲間と話すことが楽しいようで生きがいの一つでもあると話していた。

家族と過ごしたのはたった一日であったが、バーベキューやゲームをして一緒に過ごし、私たちはアメリカの人々の一般的な休日を体験することができた（写真 6）。この体験から、アメリカの人たちは日本と比べて「家族との時間を大切にする」という気持ちが大きいように感じた。また見ず知らずの私たちに家族が大変フレンドリーである事に驚いた。彼らのあたたかさは彼らの信仰からきているのではないかと考えた。

写真 6　ホストファミリーと過ごすひと時

2. 米国文化と看護に関する考察

1) 宗教

アメリカは多民族国家であり、多様な宗教がある。ホームビジットで現地の家族と共に、キリスト教の礼拝に参加した。家族に教会出席について聞くと、彼らにとって週１回の教会出席は、生活の一部であり、そこではイエスがどのように生きていたのか、イエスの生き方を学ぶと共に、その学びを共にする人、つまり出席者に会えることが楽しみであることを教えて頂いた。彼らの家庭では、子どものしつけに、聖書の言葉を利用していた。病院に入院した時は教会に通うことが出来ないためストレスになるが、毎日聖書を読んだり、病院のチャペルでお祈りをするそうで、アメリカの病院の特徴として、祈ることが出来る場所が設けられていることを知った。

日本では、ほとんどが仏教で毎日お祈りをする習慣を持っている人々が少ないため、病院の中にお祈りをする場所がある病院は少ない。そのため、学生としてこれまでの看護実習で患者のアセスメントをする際に宗教について考える機会が少なかったが、信仰を大切にしている家族に出会い、入院患者には宗教についてのアセスメントは必須であり、場合によっては看護介入し患者の宗教や信仰を大切に考えることが必要であるということを学んだ。世界にはキリスト教、イスラム教などお祈りを大切にしていたり、その宗教を考えることで心が救われたり、安心したりする人々が

いる。宗教、信仰の大切さ、重要性について考えることは必要であること、精神と心のつながりに気づいた。

2）食習慣

現地のスーパーでは食品一つ一つが大きいサイズで売っており、食事量が圧倒的に多いと感じることが多々あった(写真 7)。またお店で食事をしたときにはカロリーが高い物を好んで食べている様子がみられ、このことはアメリカ人の肥満と食の文化的背景が大きく関連していることが伺えた。

サウス・ベイ敬老看護施設では、「糖尿病の患者さんであっても、夕食にチーズバーガーを食べたいとおっしゃったら、週に複数回でない限りはお出ししています。」とスタッフから伺った。その考え方は、疾患のことよりもその人らしい生活、QOL を重視していると感じた。日本で患者さんが同様のことを言っても、看護師にまず却下されてしまうと思う。しかし、アメリカでは、我慢やしんどい思いをするより、笑顔で楽しくその人らしくという考えが強いと感じられた。日本でも「QOL を大切に考えなさい」と言いつつ、どうしても疾患寄りの考え方になり、患者に我慢をさせてしまっているケースが多いのではないかと感じる。

写真 7　ビッグサイズのピザ

3）価値観

アメリカは「自由の国」と言われている。しかしこれは「何をするのも自由ではあるが自己責任で行動する」という意味が込められている。日本では、マナーや規則に縛られていると感じることもあるが、それを守ることで自分を守ることにつながることを学んだ。BIOLA 大学での教育方法としても、自分で考えて意見をはっきりいう場面が多くあったが、これも「自由の国」アメリカでは自分で考え、責任をもって発言・行動出来ることが求められるからではないかと考えた。

価値観としては、日本の価値観は柔軟性が無く、これはこうでないといけない！というものが多く、アメリカの価値観は柔軟性があり、多民族国家であるため多くの価値観があるように感じた。

4）看護

PIH（プレスビテリアン・インターコミュニティ病院）でのことだが、看護業務でトランスファー係や心電図技士、PICC ライン看護師（中心静脈カテーテル挿入有資格）など日本にはない役割があった。重症・重体の方しか入院されないのであれば当然看護必要度も高い患者が多くなる。PIH では患者対看護師の比率が 4：1 だが、日本の 7:1 よりも業務がハードであるように見えた。米国では、RN（登録看護師）・LVN（准看護師）・CAN（看護助手）など専門ごとに細かい分業がなされているが、それは RN の仕事の負担を軽減する目的もありそのような形態なのだと考えられた。

大学の看護学概論の授業で、日本では以前、患者への援助にあたる世話や援助はすべて看護師が行っていたと習った。しかし仕事内容を細かく分けることで、1 つ 1 つの専門分野の質が向上し、それぞれのレベルを上げることが出来る。それゆえ、細かい分業はレベルのより高い看護実践につながる利点があると今回の研修で学んだ。以上より、専門ごとに分担することは必要であると考えた。さらにアメリカの病院では病棟に医師が常時いるとは限らないため、患者管理は RN の重要な

業務であると思えた。

5) 社会保障

日本では、保険でも国民皆保険や、介護保険等、充実しているが、アメリカでは保険は購入するものであり、国民に加入の義務はない。それぞれの所得に応じて、それぞれが選択しているということを、BIOLA 大学での講義で学んだ。それは、医療費の負担は個々によって違い、そのため所得による貧富の差が生じると考えられた。さらに、病院への入退院は医師ではなく主に保険会社が決めるシステムとなっているため、重症・重体の患者しか入院していない事が分かった。さらに入院条件があり、重症になってからの入院や、かかりつけ医が決まっているので、診察してもらうまでに時間がかかる。

アメリカでは一般の人々に対しては保険会社が保険を取り扱い、国の保険は一部の低所得者層が対象である。そのため、保険の対象範囲は一律ではなく、加入している保険会社によって異なる。さらに、保険はすべての医療に対するものではなく、保険会社側が支払いの必要を判断し、「今回の入院は必要がなかった」等と判断した場合については、給付金が支払われない事例もある。そのためアメリカでは国民が受けることのできる医療の質を均一に保つことは大変困難であるということを学んだ。さらにアメリカでは 15%程度の人々が、保険に加入できず、そのため速やかに病院へ受診できないことが現状であるため、これらの人々の健康課題を解決していく必要もあると学んだ。

IV. 研修プログラムの評価

1．学生によるプログラム評価および自己評価

海外看護研修からの帰国後 8 日目に、研修についての無記名アンケートによるプログラム評価と自己評価を履修学生 8 人に対し実施した。表 4、表 5 にその結果の概要を記す。

2．学生のプログラム評価および自己評価に対する教員の考察

学生たちの評価を見ると、研修先であった米国は学生に人気が高かったと言える。それが功を奏したのか、研修は楽しく今回の期間を短いと感じた学生が多かった。今回の研修は全泊ホテルであった。長期滞在型のホテルで設備も整っていたが、ダブルベッドに 2 人が寝るという形式であったことは不評であった。一方、4 人一室のルームシェアは協力して楽しい時間を過ごせたようであった。

研修プログラムの全体評価平均点は 3.7 点で、高評価であった。中でも、点数の高かったのは、BIOLA 大学看護学生との交流、および、ホストファミリーとの交流であった。学生たちは自己評価では、英語でのコミュニケーションができなかったとしながらも、現地の人々との交流に大きな満足を得ていたことがわかる。今回のような先進国の海外看護研修では、教員の視点では現地の優れた施設見学や講義などを学生に体験させたい気持ちがあるが、学生たちにとって現地の人々とのダイレクトかつリラックスした雰囲気での交流がかけがえのない体験であり彼らの異文化理解を深め人間的成長を助けるものであると言えるかもしれない。

また、今回の研修のメインとも言える BIOLA 大学看護学部における、Anne 先生講義「異文化理解と看護」、Flora 先生講義「外国人看護師と米国文化」、Akiko 先生講義「米国の保険・医療・看護制度」はいずれも満点の評価点であった。これは、3 人の先生方に共通する異文化への深い理解により、大変フレンドリーな対応と、日本人学生にも分かりやすい講義を準備して頂いたためであったと考えられる。

施設見学では、意図的に、高度専門研究病院、急性期コミュニティレベル病院、長期療養型高齢者施設という 3 つのレベルの保健医療施設を研修先に選んだ。学生たちは、それぞれの施設を、米国の特徴を日本との比較の中で学べていた。シャドウイングは先方の病院の教育担当看護師の方

表４　学生によるプログラム評価　（評価基準：4.0=満足～1.0=不満足）

n=8

評価項目	平均スコア	主なコメント
研修場所		
米国	3.9	アメリカに行きたかったから（複数）／きれいな街だった／とても良かった
ロサンゼルス		
研修時期		
2月27日―3月8日（8泊10日間）	3.4	ちょうど良かった／1ヵ月くらい居たかった（複数）／時期は実習後のため良かった
宿泊場所＆食事		
ホテルの部屋／ホテルの設備・環境	3.3	部屋がきれいだった／ベッドシェアでなく一人のベッドで寝たかった/朝食がほぼ毎日同じであった（複数）
食事（ホテル朝食／ホテル夕食）	2.8	
ルームシェア		
部屋割り	4.0	とても良かった／記録をみんなでやったり楽しく過ごせた／落ち着けるメンバーだった／記録を一緒にしたり楽しく協力し合えた／部屋替しなくて良かった
共同生活	3.8	
2月28日　BIOLA看護学生との交流		
場所：ディスニーランド	3.5	楽しかった／BIOLAの学生と交流できて英語に馴染めた／集団で行くのはとても大変／大満足／同年代との交流が良かった
BIOLA看護学生との交流	3.9	
3月1日　日曜礼拝　＆　ホームビジット		
教会の日曜礼拝出席	3.9	貴重な体験／とても満足／泊まりたかった／交流が本当に楽しかった／教会のイメージが変わって良かった／ファミリーが優しく最高だった／もう一日欲しかった／多文化の礼拝を知った／もっとファミリーといたかった（複数）
ファミリーとの交流	3.9	
ファミリーとの活動内容	3.9	
3月2日・3日　バイオラ大学		
学生によるチャペルアワー	3.5	他国の看護教育を受けられ興味深い学びができた／アメリカの大学のキャンパスライフを見られて楽しかった／翌日からの病院研修のよき準備となった／どの先生の授業もおもしろくとても勉強になった／アメリカの講義を受けたり貴重な経験となった（複数）／カフェテリアやキャンパスツアーでもっと学生と交流したかった（複数）
Anne先生講義「異文化理解と看護」	4.0	
Flora先生講義「外国人看護師と米国文化」	4.0	
Akiko先生講義「米国の保険・医療・看護制度」	4.0	
日本人留学生との交流＠カフェテリア	3.6	
キャンパスツアー	3.6	
シティ・オブ・ホープ		
講義	3.6	アメリカの先端医療を学べた（複数）／説明がよかった／難しかった
施設見学	3.6	
3月4日　プレスビテリアンIC病院（PIH）		
講義：米国の看護教育と看護システム	4.0	実際に看護師の働きを見学できたことは本当に勉強になった／とても新鮮な体験ができた／シャドウイングは大変貴重な体験で大満足です（複数）／アメリカの看護に触れられた／シャドウイングの時間がもっとほしかった／講義で日米の看護の違いがよくわかった
病院見学	3.8	
RNシャドウイング	3.8	
ランチ（ピザ）	3.6	
3月5日　ダウンタウン研修		
全米日系人博物館	4.0	日系人博物館は絶対に行くべきところと思った／博物館とても良い学びになった（複数）／もう少し時間がほしかった／予想以上に勉強になった／日系の方と交流できてよかった／おいしいランチをいただいた
ランチ＠チャイナタウン	3.8	
オリベラ通り（メキシコ人街）	3.5	
ショッピング＠ターゲット	3.6	
3月6日　サウス・ベイ敬老看護施設		
講義：施設の概要＆施設見学	3.8	日系の方と交流できとても良かった／利用者の方に私たちのパフォーマンスが好評で良かった（複数）／施設内が暑かった／（ランチの）カリフォルニア米がおいしかった
ランチ	3.9	
パフォーマンスの発表		
感謝会		
感謝会＠現地レストラン	3.4	サービスが良かった／あまりおいしくなかった／とても楽しかった／チップの計算が大変だった（複数）／現地のお店に行く体験がよかった
費用　24万円＋奨励金5万円		
	3.9	安く行けたと思う／良かった／妥当である/30万円以内で行けたのは良かった
プログラム評価　全体平均	3.7	

表 5　学生による自己評価　（評価基準：4.0=大いにある～1.0＝全くない）

		n=8
評価項目	平均スコア	主なコメント
多文化理解／他文化理解	3.9	アメリカ文化についてよき学びができた/多文化理解が人間理解につながることを学んだ/現地の人と触合いアメリカ人の価値観や文化を理解できた/文化・生活・宗教・人柄などに触れ理解できた/相手の価値観について考えながら接することが大切と学んだ
自文化理解	3.8	日本の良さが改めて分かった/日米の違いを知るためには日本の理解が必要であると学んだ/自分の文化を知ろうとできた/日本文化・大阪文化との比較で学べた/米国文化との比較で自文化を理解できた/異文化に触れたことで自文化を分かることができた
英語力／コミュニケーション力	2.5	英語の大切さを学んだ/英語が全然できなかった/英語の勉強の必要性を感じた（複数）/話せないことも多々あったが気持ち的に成長した/頑張ったがペースはスローだった/十分に発揮できなかった/事前学習はためになったが一週間では難しい
協調性／チームワーク	3.3	できたりできなかったり/協力のため働きかけた/トラブルは少しあったけど強調したと思う/トラブルをみんなで乗越えられた/仲良く生活できた/チームワークの大切さを学んだ
自立心	3.3	自立心ができた/自立し考えることの大切さを知った/以前より人の目がきにならなくなった
積極性	3.4	積極的に行動した/積極性を発揮できた/頑張れたと思う
全人的成長	3.6	成長できた/目的意識をもって参加したので学びが深まったと思う/積極的に発言できるようになった/たくさんの経験を通して成長できた/視野が広がり人として成長できた
自己評価　全体平均	3.4	

からの提案で実現した。米国の看護の特徴を学ぶ上では、コミュニティレベルの病院におけるシャドウイングは大変貴重な体験であったと言えるが、同時通訳が機能しないペアもあり、学生の評価点にばらつきがあった。シャドウイング実施における今後の課題である。

施設見学ではないが、多民族社会であるロサンゼルスの特性を学ぶため、リトルトーキョー、チャイナタウン、メキシコ人街など、米国マイノリティ・コミュニティを訪れた。全米日系博物館では、熱心な日系人ボランティアによる語り部の方から、戦争時に米国で迫害された日系人と彼らの誇り高い態度を教えて頂き、学生たちは茫然とするとともに、自分たちもその人々と同じ日本人であることに大変誇りを感じる貴重な経験となった。最後に費用については、3.9 という高い評価から、学生たちに不満はなく、費用に見合った研修が受けられたという満足の現れであったと捉えられる。

自己評価の項目を見ると、多文化理解／他文化理解の評価点が最も高く、このことから国際看護学演習の最大の目的は達成できたと言える（表 5）。さらに、自文化理解の評価点も高かったが、これは異文化理解をするためには自文化理解が必要であるという異文化理解の鉄則が学べていることを意味する。一方、自分の英語力やコミュニケーション力に低い評価をしている学生が多かったが、このような挫折経験は今後の学習の動機付けとしても作用すると言えるだろう。チームワークについては、研修中にチーム内で衝突はあったものの、皆で研修を成功させるために協力して困難な問題を乗り越えた。これについても客観的に評価できていることが成果であったと言える。しかしながら、10 日間程度の研修では、自立心や積極性、全人的成長が全員に見られることを望むのは難しいかもしれない。

V. 海外研修の総合的評価と課題

2015 年度の海外看護研修参加学生は 8 人であり、当該研修を開始した 2013 年度の 4 人、翌

年度の 9 人という経過を見ると、参加者人数は今後も 8 人前後に推移するのではないかという予測ができる。当該研修の対象学年は 80 名前後であることから、約 1 割の学生が海外看護研修に参加していることになる。大学側は海外研修奨励金を支給する制度を設けていることから、今後も更に多くの学生がこのような海外での研修を受けることができるような工夫が必要である。

今回 2015 年度の看護海外研修は、過去のオーストラリアにおけるパッケージ・プログラム中心ではなく、担当教員のネットワークを生かした手作りの研修を企画・実施し、概ね高い評価を得た。

こうしたオリジナルの企画運営には勿論、課題もある。それは科目担当教員への負担と継続性、そして個別の研修先の都合による急な予定変更のリスクである。海外看護研修が授業の一環であることを考慮すると、大学としては、オリジナル・プログラムを開発する一方で、いつでも利用できるパッケージ・プログラムへのアクセスをバックアップとして確保しておくことが重要と考える。しかしながら、顔の見える関係性を土台としたオリジナル研修プログラムは、現地の受入れ施設関係者の高いモチベーションを引き出すことができ、パッケージ・プログラムでは得られないダイナミックでパーソナルな研修を学生に提供し彼らに高い満足度を与えることができると考える。

VI. 謝辞

2015 年度海外看護研修の実施にあたり、ご協力をいただきました学内の諸先生方、 関係者の皆様に感謝申し上げます。また、渡航前英会話レッスンを担当して下さった食文化学科の上村幸弘教授に深く感謝を申し上げます。さらに、米国での研修企画と運営に特にご尽力を頂きました、BIOLA 大学、Presbyterian Intercommunity Hospital(PIH)、City of Hope ならびに South Bay Keiro Nursing Home の皆さま方に心より感謝を申し上げます。

VII. 補足

本文中の学生の文章ならびに写真は、当該学生およびカウンターパートの許可を得て掲載するものである。

VIII. 文献

- BIOLA University (2015): Retrieved Nov. 28, 2015 from https://www.biola.edu/
- City of Hope (2015): Retrieved Nov. 10, 2015 from http://www.cityofhope.org/about-city-of-hope/who-we-are
- Keiro Senior HealthCare (2015): Retrieved Oct. 20, 2015 from http://www.keiro.org/page.aspx?pid=529
- PIH Health(2015): Retrieved Nov. 10, 2015 from http://www.pihhealth.org/about/our-history/
- 全米日系人博物館 JAPANESE AMERICAN NATIONAL MUSEUM (2002): Retrieved Nov. 28, 2015 from http://www.janm.org/jpn/jpnprogram/edupro.html